



明石姫君の誕生と御佩刀 : 『源氏物語』から『栄花物語』へ

陳, 斐寧

(Citation)

国文学研究ノート, 54:1-12

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81008855>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008855>



明石姫君の誕生と御佩刀

— 『源氏物語』から『栄花物語』へ —

陳 斐寧

一、はじめに

『源氏物語』「澹標」巻は、源氏物語第一部のなかで、一つの大きな節目となる巻である。皇統譜から弾き出された光源氏が須磨の地で遠縁である明石の君と運命的な出会いを果たし、「宿曜に御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし」〔澹標〕②二七五頁⁽¹⁾と描かれているように、将来の后がねと予言される明石姫君が明石の地で誕生した逸話を書いた物語である。この明石姫君が誕生した後の物語を、語り手は次のように記している。

車にてぞ京のほどは行き離れける。いと親しき人さし添へたまひて、ゆめに漏らすまじく、□がためたまひて遣わはす。御佩刀、さるべき物など、ところせきまで思しやらぬ。限なし。〔澹標〕②二七九頁

三月中旬に姫君が生まれたとの報が入り、光源氏はごく親しい召使の者付き添わせ、ほかに情報漏れないようにして、乳母を派遣した。そのとき、光源氏が彼の唯一の娘のために、「御

佩刀」を乳母に明石まで送った場面の描写が上記のものである。明石姫君の誕生については、これまで数多くの研究が積み重ねられてきた⁽²⁾。さらに、『源氏物語』などの物語世界において、通過儀礼が果たす役割の重要性についても、論者がいくつ書かれ、問題提起がなされてきた⁽³⁾。明石姫君の誕生に当たって、光源氏から「御佩刀」が贈られたことについては、早くも古注釈『河海抄』に「長和二年七月十六日降誕即日被奉御劍是其例也」⁽⁴⁾との説明があるものの、「天皇ではない」臣下の身である光源氏が姫君に御佩刀を送ることの意味については十分に明らかにされておらず、研究史においても問題視されてきた⁽⁵⁾というのが実情である。

本論では、以上の先行研究を踏まえながら、まず、平安中期に成立した古記録での皇子皇女の誕生の御佩刀に関する用例を見ることで、御佩刀が如何に通過儀礼として重要な役割を担っていたかについて検討する。それを、同時代の物語作品などの御佩刀の用例と比較しながら、『源氏物語』「澹標」巻において、臣下の身である光源氏が姫君の誕生にあたり、なぜ御佩刀を

贈ったのかという問題について考察し、さらにそれを、後世に如何なる影響をもたらすかについて考えてみたい。

二、皇子皇女誕生における御佩刀について——古記録から

古記録において、「皇子」の誕生にあたり御佩刀を贈った最初の例は、『九曆』に見られる。

〔史料1 村上天朝〕『九曆』天曆四年（九五〇）五月二十四日条（憲平親王の誕生）

二十四日、寅剋男皇子誕生、自去夜子剋有産気色（略）降誕之後、即野劔一柄・犀角一株・虎首一頭、置枕上為護へ自今以後、懷任皇子、豫先可儲件等物、臨其時雖求、勿難具

村上天皇の女御安子が天曆四年（九五〇）五月に憲平親王、のちの冷泉天皇の誕生のときに、村上天皇より、前例のない待遇で迎え入れるために、野劔・犀角・虎首のような守り物が贈られ、この件について、「置枕上為護」と記されていた。また、『九曆』同日条の割り注には「自今以後、懷任皇子、豫先可儲件等物」と記されており、憲平親王の誕生以後、皇子を懷妊した際、予め野劔・犀角・虎首を用意しておくようにとされている。ここから、憲平親王誕生に際しての「野劔」は、皇子皇女誕生の際の御佩刀の先例と看做してよからう。

〔史料2 一条朝〕

①『小右記』長保元年（九九九）十一月七日条（敦康親王の誕生）

卯刻中宮産男子（略）主上以右近中将成信（源成信）被奉御劔於中宮

②『御堂関白記』寛弘五年（一〇〇八）九月十一日（敦成親王の誕生）

午時平安男子産給（略）從内賜御劔

③『御堂関白記』寛弘六年（一〇〇九）十一月二十五日（敦良親王の誕生）

辰三刻、男皇子降誕給（略）巳時從内給御劔

史料2は一条朝において、三人の皇子（敦康親王、敦成親王、敦良親王）の誕生をめぐる『小右記』『御堂関白記』での記述である。注意すべきことは、一条朝の長保元年（九九九）の敦康親王の時から、「主上」「内」と記されていることで、ここから、一条天皇が「天皇」として三人の皇子にそれぞれ御佩刀を贈ったことがわかる。

〔史料3 三条朝〕

①『御堂関白記』長和二年（一〇一三）七月六日（禎子内親王の誕生）

八日、戊、從大内以朝経朝臣給御劔

② 『小右記』 長和三年（一〇一四）十月七日（敦貞親王の誕生）

十三日、丙寅、資平云、昨日式部卿宮（＝敦明親王）妻七夜、自内裏以左少将経親（蔵人）、被遣御劔并御馬（略）

上の史料3の2例はいずれも、三条天皇の時代の用例である。まずは『御堂関白記』の用例を見る。禎子内親王の例は「大内」、つまり天皇から御佩刀を贈られたことがわかる。この記事から、三条天皇は、村上天皇時代から天皇自ら御佩刀を贈った先例を踏まえていることがわかる。この例は、『栄花物語』巻第十一では、「御劔いつしかと持てまぬれり。（略）これをはじめたる例になりぬべし」と記されたように、これが「皇女」に御佩刀が下賜された初例であることが古注釈の時代からすでに指摘されている。また、禎子内親王の例が『源氏物語』「落標」巻における光源氏が明石姫君に御佩刀を贈る行為を考えると、よく挙げられる例として知られている。だが、注意すべきは、禎子内親王の場合は、父の三条天皇が「天皇」という身で御佩刀を贈った点であり、この点は明らかに『源氏物語』における賜姓源氏の光源氏の身分と違うところである。

さて、次の用例を見てみよう。敦貞親王誕生の例である。禎子内親王が誕生した翌年、長和三年（一〇一四）敦明親王の長男敦貞親王が誕生したときに、父親の敦明親王がみずから御佩刀を贈るのではなく、祖父の三条天皇が内裏から孫の敦貞親王

に御佩刀を贈ったのである。この例からわかるように、御佩刀を贈るという行為においては、父親という続柄より「天皇」という身分が重視されているということである。

ここまでの用例の検討からわかることは、村上天皇時代から天皇が自らの血脈を継承する皇子に御佩刀を下賜することが慣例となり、三条天皇の代まで踏襲されていることであり、さらに天皇が祖父の立場として、孫に御佩刀を下賜する例も見られるということである。

〔史料4 後一条朝〕

① 『御堂関白記』 長和五年（一〇一六）七月二十日（姫子女王の誕生）

壬戌、式部卿宮（＝敦康親王）奉送野劔并絹百足

② 『左経記』 万寿二年（一〇二五）八月三日（親仁親王の誕生）

抑御産則自東宮差亮公成朝臣、遣御劔云々

③ 『左経記』 万寿三年（一〇二六）十二月九日（章子内親王の誕生）

十五日、前日御劔持来勅使蔵人資房

さて、史料4は後一条天皇の時代の用例である。まずは、『御堂関白記』長和五年姫子女王誕生の例から考えてみよう。三条天皇が長和五年（一〇二六）一月に讓位したあと、後一条天皇

が即位したのだが、同年七月二十日に、新しく即位した後一条天皇の異母兄敦康親王の長女、姫子女王が誕生している。その際に、姫子女王に御佩刀を贈った人物は、村上朝以来の慣例となっている「天皇」ではない。ここで重要なのは、姫子女王の父、つまり、後一条天皇の異母兄敦康親王が「式部卿」という身で、娘姫子女王に御佩刀を贈っているという点である。

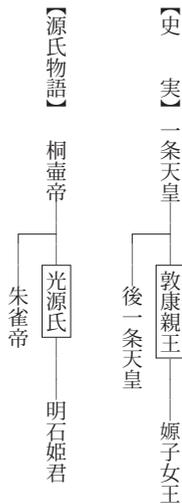
さらに、『左経記』によると、万寿二年（一〇二五）八月、後一条天皇の同母弟、敦良親王の子親仁親王が誕生したときも、これも、後一条天皇が御佩刀を下賜するのではなく、敦良親王があくまでも「東宮」という身で御佩刀を贈っている。一方、『左経記』万寿三年（一〇二六）十二月九日には、後一条天皇の長女、章子内親王が誕生したとき、父の後一条天皇が皇女に御佩刀を贈った記事が見える。

このように、史料4から、村上天皇時代の先例である「天皇からの」御佩刀下賜は、後一条天皇の代よりの姫子女王の誕生・親仁親王の誕生という両例に見られるように、天皇自ら贈るのではなく、皇統譜から出身した皇子がみずから「式部卿」「東宮」という身で継承者に御佩刀を贈るようになるという変化が生じてきたことがわかる。

さて、ここまでの用例をふまえ、後掲の表一にそうした変化をまとめた。このように、歴史上における史実を見てきたが、『源氏物語』『遷標』における「明石姫君の誕生」のいわば「実例」について、古来、禎子内親王の例が挙げられてきたのだが、し

かし、三条天皇が天皇という身分であることを考えれば、むしろ長和五年（一〇一六）七月二十日での、姫子女王の誕生の状況のほうが、『源氏物語』における光源氏が置かれた状況に近いことがここからわかる。

ここで、姫子女王と明石姫君の系図を示せば、以下のようになる。



村上天皇時代からの先例を踏まえるならば、御佩刀を贈る行為は「天皇」がなすことであるが、この姫子女王の場合は後一条天皇ではなく、天皇の異母兄の敦康親王が娘に御佩刀を贈ったのである。この点は『源氏物語』における明石姫君の誕生の時、朱雀帝ではなく、異母弟の光源氏が自ら御佩刀を贈っている構図と同じように考えられよう。両例とも、異母兄弟の即位によって、即位の可能性が薄くなる敦康親王と光源氏が娘に御佩刀を贈ったものである。ここから考えて、明石姫君に御佩刀を贈る行為については、むしろ敦康親王が娘姫子女王に御佩刀を贈った実例から解釈したほうがよいと思われる。

三、物語における御佩刀

それでは、「御佩刀」の下賜に関し、古記録以外に同時代の物語文学の用例について調べてみよう。『源氏物語』においては、「明石の姫君」の例以外に、「御佩刀」の下賜の例がもう一つ見られるのである。

『源氏物語』「宿木」巻での、中の君が男子を出産したときの、以下のような描写である。「内裏にも聞こしめして、「宮のはじめて大人びたまふなるには、いかでか」とのたまはせて、御佩刀奉らせたまへり」(「宿木」⑤(四六一頁)とあり、ここでは「御佩刀奉らせたまへり」と記されており、帝から若君に御佩刀を贈った描写が見られる。ここでの記述は、事実上における、村上天皇時代から「天皇」みずから「御佩刀」を贈るという先例を踏まえていることがわかる。

この『源氏物語』における匂宮の若宮の例だけではなく、平安後期の物語である『夜の寝覚』『狭衣物語』を見ても、「御佩刀」とは殆ど帝からの下賜であるとする描写が確認できる。例えば、『夜の寝覚』巻五に「内」にも、御思ひのほどなれど、例あることは忍びやかに、御佩刀など賜はせても(略)(五三四頁)と描かれており、督の君に皇子が誕生したとき内裏から「御佩刀」が下賜された描写がある。また、『狭衣物語』には、こうした描写が2例見られる。『狭衣物語』巻二に「内裏の御使返りまゐりて、「かく」と奏すれば、「うれし」と聞かせたまひ

て、御佩刀や例の作法どもありけり」(①「巻二」二二八頁)とあり、狭衣と女二の宮の密通によって誕生した若宮には、嵯峨帝より「御佩刀」が下賜され、その喜びを示している。また、『狭衣物語』巻四にも「内裏には、いかにもいかにも、まだならはせたまはぬことなれば、御佩刀や何や扱はせたまふも、珍しううれしきことにぞ思しめしたる」(②「巻四」二五一頁)とあり、後一条帝と女一の宮の間に生まれた皇女に、帝から「御佩刀」が下賜された場面が書かれている。

こうして、『源氏物語』の匂宮の皇子の例、『夜の寝覚』の皇子の例、そして『狭衣物語』における若宮と後一条帝の皇女の例から見れば、物語中における御佩刀は、およそ「帝」みずから贈ることがわかり、それは歴史上において、村上天皇時代から、「天皇」みずから子孫に御佩刀を贈る先例を踏まえていることがわかる。こうした用例から、『源氏物語』の、「臣下」である光源氏が明石姫君に御佩刀を贈る設定の異様さを一層、照らし出したのである。

四、『栄花物語』における御佩刀と誕生

さて、次は、『栄花物語』における誕生の御佩刀に関する用例を検討してみる。管見によれば、『栄花物語』における誕生の御佩刀の用例は、12例見られる。各条の内容を簡単に述べる(10)と次のようになる。

① 巻一「月の宴」(広平親王の誕生)

(『栄花物語①』二四頁)

あなめでた、いみじとののしりたり。内よりも御剣よりは
じめて、例の御作法の事どもにて、もてなしきこえたまふ。

② 巻一「月の宴」(憲平親王の誕生)

(『栄花物語①』二五頁)

天曆四年五月二十四日に、九条殿の女御、男御子生みたて
まつりたまひつ。内よりはいつしかと御剣もてまゐり、お
ほかた御有様心ことにめでたし。

③ 巻二「花山たづぬる中納言」(懷仁親王の誕生)

(『栄花物語①』一〇三頁)

内にまつ奏せさせたまへれば、御剣奉らせたまふほどぞ、
えもいはずめでたき御気色なるや。

④ 巻五「浦々の別」(敦康親王の誕生)

(『栄花物語①』二八三頁)

上に奏せさせたまひて、御剣もて参る。

⑤ 巻八「はつはな」(敦成親王の誕生)

(『栄花物語①』四〇三頁)

まことに内より御剣すなはち持てまゐりたり。御使には頼
定の中将なり。

⑥ 巻八「はつはな」(敦良親王の誕生)

(『栄花物語①』四四〇頁)

内にも聞しめして、いつしかと御剣あり。すべて何ごとも、

ただはじめの例を一つ違へず引かせたまふ。

⑦ 巻十一「つぼみ花」(禎子内親王の誕生)

(『栄花物語②』一三三頁)

内には、けざやかに奏せさせたまはねど、おのづから聞し
めしつ。御剣いつしかと持てまゐれり。例は女におはしま
すには御剣はなきを、何ごとも今の世の有様は、さきざき
の例を引かせたまふべきにあらねば、ことのほかにめでた
ければ、これをはじめたる例になりぬべし。

⑧ 巻二四「わかばえ」(通房の誕生)

(『栄花物語②』四四二頁)

殿(＝頼通)聞しめすに、あさましきまで思されて、御剣
など遣はずほどぞめでたきや。

⑨ 巻二六「楚王のゆめ」(親仁親王の誕生)

(『栄花物語②』五〇一頁)

さて東宮より、いつのほどかと思ゆるまで、御剣もてまゐ
りたるほど、いみじういつしかと思しめしたり。

⑩ 巻二八「わかみつ」(章子内親王の誕生)

(『栄花物語③』八三頁)

内にも聞しめして、(略)かへすがへすも聞えさせたまひて、
御剣持てまゐりたり。

⑪ 巻三八「松のしづえ」(実仁親王の誕生)

(『栄花物語③』四二九頁)

内の御使、宮の御使、われまつ奏せんわれまつ奏せんとぞ

急ぎ参る。(略)源中納言の四位少将家賢、御劍持てまゐるを、(略)

これらは『采花物語』に描かれる御佩刀の用例を古い順に並べたものである。さて、『采花物語』の用例を後掲の【表二】に記す。この11例から見られるように、『采花物語』⑧番の巻二四「わかばえ」における通房の誕生での「殿」つまり、関白頼通が御佩刀を贈る記事と、⑨番の巻二六「楚王のゆめ」における親仁親王の誕生での、「東宮」つまり、後一条天皇の弟、敦良親王が御佩刀を贈る記事、この2例を除いて、いずれも皇子皇女の誕生のときに、「内」つまり天皇からの「御佩刀下賜」が執り行われてきたことがわかる。

『采花物語』を見るかぎりでは、ほとんどの用例で、「御佩刀」とは、在位中の天皇が皇子皇女が誕生したとき、自分の「血脉」を継承する皇子、皇女に下賜するものであることがわかる。これらについては村上朝以来の史実とほぼ一致する記述がなされている。

だが、ここで注意すべきなのは、⑧番、巻二四「わかばえ」通房の例である。藤原頼通の嫡男、藤原通房の誕生に関しては、『采花物語』に、万寿二年(一〇二五)正月十一日に、「対の君」源憲定女が通房を産むとき、「御劍など遣はずほどぞめでたきや」と記されているように、「御佩刀」を贈ったのが頼通であった。

これまで、「御佩刀」下賜は、およそ、(一)天皇が皇子・皇子あるいは皇孫、(二)皇統譜から出身した皇子が子に御佩刀を贈るものだと、古記録や物語において語られてきた。だが、万寿二年の通房の誕生にあたっては、頼通が摂関家という出身で通房に「御佩刀」を贈ったのである。頼通が通房に御佩刀を贈る例は、それまでの古記録と物語の用例に当てはまらない異例なものである点が興味深い。なぜかという点、万寿二年の頼通は、関白左大臣の身分ではあるが、彼はまず(一)天皇ではなく、さらに(二)皇統譜から出身した皇子ではないからである。

頼通は、歴史上において「皇統譜」からの出身者がその継承者に「御佩刀」を贈るはずであった行為を、摂関家の人間としてなしている。ではなぜ、摂関家の頼通がわざわざ通房に御佩刀を贈ったのであろうか。その先例をいつたいどこにもとめればよいのかという問題について考える必要がある。

五、「対の君」と「明石の君」の相似性

ここで、改めて想起すべきなのは、『源氏物語』明石姫君の例である。周知のように、明石姫君に「御佩刀」を贈った時の光源氏は「皇統譜」から弾き出された、臣下の身分である。頼通が通房に御佩刀を贈る先例を求めらば、ほかならぬ『源氏物語』の光源氏に見出すことができるわけである。光源氏と頼通は、二人とも「皇統譜」を継承することもなく、親王など

という身分でもない臣下の身であるからである。

それでは、まず『源氏物語』における明石姫君の生母、明石君に関する描写を見てみよう。『源氏物語』「常夏」巻には、明石姫君をめぐる以下のような叙述が見られる。

劣り腹なれど、明石のおもとの産み出でたるはしも、さる世になき宿世にて、あるやうあらむと、おぼゆかし。

（「常夏」③二二九頁）

とあるように、明石姫君は「劣り腹」であると強調されていた。さて、一方通房の誕生をめぐる内容を『栄花物語』から見てみよう。『栄花物語』巻二四「わかばえ」では、以下のような描写も見られる。

関白殿年ごろ御子といふもの持たせたまはぬ嘆きを、入道殿、上までに思しめしたるに、故式部卿宮の御子の右衛門督は、（略）有国の宰相の女の腹に女子二人生ませたまへりしを、（略）姉君は致仕の大納言の御子の則理を語らひたりけるほどに、尾張守になりければ、尾張へいにけり、おとこの君はわざと名もつけさせたまはで、ただ住みたまふままに、対の君とぞ召しける、この君に殿おのづから睦ましくならせたまひにけり。

②「わかばえ」四四〇頁、四四一頁）

とあり、憲定が有国女に通い、女子二人生まれたが、その次女が「対の君」と呼ばれ、頼通の男児を出産したことがわかる。また、憲定女「対の君」が「殿の御まかなひ、御髪まありなど

に二所ながらさぶらはせたまふほどに」（②「わかばえ」四四〇頁）とあるように、彼女は頼通に食事や理髪に奉仕する地位であることが知られている。また、「めざましげなる御気色かたはらいたくて、やうやう里がちになりゆけば」（②「わかばえ」四四一頁）とあるように、正妻隆姫が不快のなか、頼通の嫡男通房が「劣り腹」の「対の君」から生まれたのである。では、つぎの描写に注目していきたい。「対の君」が通房を出産したとき、『栄花物語』には以下のような面白い描写がみられる。

殿はかたはらいたくて、御みづからはえおはしまさねど、おぼつかなさの御使しきりなりけり。

②「わかばえ」四四〇頁、四四一頁）

ここでは、頼通が正妻隆姫に対する遠慮から自分自身では外出することなく、「おぼつかなさの御使」を差し向けている。ここで留意すべきは、通房の誕生における頼通の境遇と類似した描写は、『源氏物語』の光源氏にも見受けられるという点である。明石の姫君が誕生した時をめぐる描写には、以下のような内容がある。

公私いそがしき紛れに、え思すままにもとぶらひたまはざりけるを、三月朔日のほど、このころやと思しやるに、人知れずあはれにて、御使ありけり。（②「潯標」二七五頁）とあるように、明石姫君の誕生で、光源氏も周囲に遠慮しながら、みずから見舞いに行かない代わりに使者を派遣し、「御佩刀」

を贈ったことがわかる。『栄花物語』と『源氏物語』において頼通と光源氏をめぐる境遇の描写が類似しているように見える。これだけではなく、また、例えば通房の養育に関しては、『栄花物語』は以下のように叙述している。

かくて、関白殿の若君、この月二十八日に大殿に渡らせたまふ。その夜の有様思ひやるべし。いとわざと、まことにことごとしうもてなさせたまへり。殿や上など土御門殿に待ち迎へ、いみじくうつくしみたてまつらせたまふ。(略)大宮、土御門殿におはしませば、つねに迎へたてまつらせたまひて、抱きうつくしませたまふ。

②「わかばえ」四五九頁)とあり、以上の描写によると、「劣り腹」の通房が憲定女のもとで養育するのではなく、道長の土御門殿で養育されるようになり、道長、倫子また大宮の彰子に可愛がられることがわかる。一方、明石姫君の場合は、『源氏物語』「松風」巻に以下の描写がある。

「いかにせまし。隠ろへたるさまにて生ひ出でむが、心苦しう口惜しきを、二条院に渡して、心のゆく限りもてなせば、後のおぼえも罪免れなむかし」と思ほせど、(略)

②「松風」四〇四頁)とあるように、将来の入内する時の世評のため、「劣り腹」の明石姫君を二条院で養育しようと考えていたことが知られる。結局は「児をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば、得

て抱きかしづかばや、と思す」(②「松風」四一三頁)と記されるように、明石姫君は紫上に可愛がられ、二条院のもとで養育されていることが描かれている。

すなわち、『源氏物語』における明石姫君の誕生と『栄花物語』における通房の誕生に際して、光源氏と頼通が同じ「劣り腹」の出身の子供に直面する境遇はまったく同一である。ここでまず注意すべきは、光源氏と頼通が、同じ「劣り腹」の通房と明石姫君に対して、わざわざ御佩刀を贈ったというところである。『源氏物語』のなかで、「御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべしと勸へ申したりしこと、さしてかなふなめり。」(②「薄雲」二百七十五頁)と物語の叙述にあるように、「明石の姫君」は、将来必ず「后」となると約束されている身であるが、しかし、「後の世に人の言ひ伝へん、いま一際人わろき暇にや、」(②「松風」三九〇頁)ともされ、「劣り腹」の生母から生まれた「明石の姫君」が「暇」であると『源氏物語』のなかで強調されている。

例えば、『源氏物語』「薄雲」巻に、「いかにぞや、人の思ふべき暇なきことは、このわたりに出でおはせで、と口惜しく思さる」(②「薄雲」四二五頁)とあり、光源氏が高貴な身分の女性に「暇なき」子が生まれなかと憂慮している描写が見られる。こうしてみれば、『源氏物語』のなかで、高貴な身分での「暇なき」子が如何に重要視されているか(逆にいえば「暇」のある子が問題とされているか)は明らかであろう。このよう

に、「劣り腹」という「瑕」を持ちながら、生まれてきた「明石の姫君」に光源氏がわざわざ「御佩刀」を贈った理由として、その出身の「瑕」を補填するという理由が想定できる。

「御佩刀」とは、これまで確認したように、それは「皇統譜」の「血脈」を受け継ぐ者に贈る「印」としてその子の将来を保証するものである。そうした歴史的な脈を参照すれば、光源氏が「明石の姫君」の出身を格上げし、さらに「劣り腹」の姫君の将来を保証する仕組みとなっているものと解釈できるのである。

さて、先に、通房が誕生した時をめぐる描写が『源氏物語』と類似していることを挙げたのであるが、このような『源氏物語』の叙述を参照すれば、通房が誕生したとき頼通が「劣り腹」の通房に「御佩刀」を贈った行為について、頼通もまた光源氏の先例に倣い「劣り腹」の通房を格上げするために「御佩刀」を贈ったのだと解釈できる。つまり、この叙述上の類似は、『栄花物語』の作者が、歴史における「御佩刀」を贈るという行為の儀礼的な意味を理解しているだけでなく、「劣り腹」である通房の誕生について『源氏物語』と類似した描き方をなすことによつて、将来、摂関家を継承する「劣り腹」の通房を「明石の姫君」と同様にその身分を格上げすることを狙ったものであると解釈できる。

既に、福長進氏が述べるように、『源氏物語』が虚実を織り交ぜてあり得べき歴史を書いたことが『栄花物語』を誕生させ

た。』ことが研究史において指摘されている。具体的には『栄花物語』の歴史叙述は「出来事間の客観的関係すら無視した組みかえがなされ⁽¹²⁾」ているということである。例えば、「敦康親王の誕生を伊周、隆家の召還理由と」したのは『源氏物語』の光源氏召還の論理によつて⁽¹³⁾である。福長氏が述べるように『栄花物語』が歴史表象をどのように創造しているかを広い視野から明らかにする」必要があるが、先に述べた「劣り腹」である通房の誕生を、『源氏物語』と類似した叙法で描くことは、そうした歴史表象の創造の一つの例証となるであろう⁽¹⁴⁾。

こうして、『栄花物語』は、『源氏物語』の虚構の世界と頼通の現実の世界、この二つを重ね合わせることで、より当時の歴史的な文脈を重層的に浮上させているのである。

六、結びにかえて

以上のように、平安中期に成立した古記録での皇子皇女の誕生の御佩刀に関する用例を通して、「御佩刀」が如何に通過儀礼として重要な役割を担っていたかについて検討してきた。

まず、『源氏物語』の主人公、光源氏が明石姫君に御佩刀を贈ったことについて、史実に長和五年（一〇一六）七月二十日に、敦康親王が「式部卿」というの身で、姫子女王に御佩刀を贈った事例を見出すことができた。さらに、虚構である『源氏物語』で示された構図が、『栄花物語』において頼通が「劣り腹」の

通房を撰閲家の後継者として格上げするために取り入れられ、その歴史叙述が享受されていくことで一つの先例として定着していく。この先例は、憲定女「対の君」が通房を生んだ際に、撰閲家の頼通が御佩刀を贈ることを通して、「劣り腹」の後継者の「暇」を補填するものともなるのである。この興味ぶかい現象は、虚構の論理が現実模倣され、歴史の中で享受されたひとつの例と言えるのではないのだろうか。

※古記録の引用本文については、『九曆』『小右記』『御堂閑白記』に関しては東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録』(岩波書店)による。『左経記』に関しては増補史料大成刊行会「増補史料大成」(臨川書店)を使用した。なお、本文の割注は、山括弧で括弧して示した。

注

(1) 『源氏物語』の引用は、阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源衛氏校注、日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)による。括弧内の算用数字は巻数、漢数字は頁数を表す。また、適宜、私に網掛け線を付す。以下同様。

(2) 『源氏物語必携』(学燈社、一九七八年)、『新源氏物語必携』(学燈社、一九九七年)など「明石」「濔標」巻の参考文献を参照。他に日向一雅氏『源氏物語の主題——「家」の遺志と宿世の物語の構造——』(桜楓社、一九八三年)、植田恭代氏「明石姫君

誕生の儀礼と和歌」(『源氏物語と儀礼』武威野書院、二〇一二年)、高橋麻織氏「『源氏物語』冷泉帝主催の七夜の産養」(『中古文学』二〇一四年五月)などがある。

(3) 服藤早苗・小嶋菜温子編『生育儀礼の歴史と文化』(森社社、二〇〇三年)、日向一雅『源氏物語——その生活と文化』(中央公論美術出版、二〇〇四年)、小嶋菜温子『王朝文学と通過儀礼』(竹林舎、二〇〇七年)、山中裕編『第三部 風俗と通過儀礼』『歴史のなかの源氏物語』(思文閣出版、二〇一一年)、小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』(武威野書院、二〇一二年)などの成果がある。

(4) 『河海抄』の引用は、『黎明抄・河海抄』(角川書店、一九七八年)による。

(5) 伊藤慎吾『風俗上よりみたる 源氏物語描写時代の研究』(風間書房、一九六八年)。

(6) 憲平親王の誕生に当たって、天皇から野鈿・犀角・虎首のような守り物が贈られる論に関しては、小嶋菜温子『九曆』逸文、天曆四年の産養を読む』(『源氏物語の性と生誕』立教大学出版会、二〇〇四年)がある。

(7) 『河海抄』第七に「長和二年七月十六日降誕即日被奉御劍是其例也」とある。また、飯沼清子氏「誕生・産養・裳着」(山中裕編『源氏物語を読む』、吉川弘文館、一九九三年)に詳しい説明が見られる。

(8) 『夜の寝覚』の引用は、鈴木一雄氏校注、新編日本古典文学全集

『夜の寝覚』（小学館）による。漢数字は頁数を表す。また適宜、私に網掛け線を付す。

(9) 『狭衣物語』の引用は、小町谷照彦氏・後藤祥子氏校注、新編日本古典文学全集『狭衣物語』（小学館）による。括弧内の算用数字は巻数、漢数字は頁数を表す。また、適宜、私に網掛け線を用いて誕生した若宮に関する描写で、「御佩刀」と「御博士」の本文があり、内容から判断すれば、こゝは、「御佩刀」の異文をとったほうがよいかと思われる。

(10) 『栄花物語』巻十一「つぼみ花」の段に、禎子内親王の誕生には御佩刀に関する描写は二箇所も見られるが、こゝは1例として看做す。なお、ここの十二例のほかに、『栄花物語』には「御剣」という例も見られるが、誕生の時の「守り刀」には当たらないので、こゝで深く論をしないことを断る。

(11) 古記録（『九曆』『御堂関白記』『小右記』『権記』『左経記』『春記』）などによれば、臣下が自分の子孫に「御佩刀」を与える例は見当たらない。

(12) 福長進氏『歴史物語の創造』（笠間書院、二〇一一年九月）序論十六頁。

(13) 前掲書 十六頁。

(14) 前掲書 十七頁。

（ちんひねい／台湾・静宜大学）

【表一】古記録による御佩刀の用例

	御佩刀が贈られる人	誕生日	御佩刀を贈る人	御佩刀を贈る人の身分
村上	憲平親王	天曆四年五月二十四日	父	天皇
一条	敦康親王	長保元年十一月七日	父	天皇
一条	敦成親王	寛弘五年九月十一日	父	天皇
一条	敦良親王	寛弘六年十一月二五日	父	天皇
三条	禎子内親王	長和二年七月六日	父	天皇
三条	敦貞親王	長和三年十月七日	祖父	天皇
後一条	姫子女王	長和五年七月二十日	父	式部卿
後一条	親仁親王	万寿二年八月三日	父	東宮
後一条	章子内親王	万寿三年十二月九日	父	天皇

【表二】『栄花物語』による御佩刀の用例

順番	御代	御佩刀が贈られる人	誕生日	御佩刀を贈る人
①	村上	広平親王	天曆四年	内（天皇）
②	村上	憲平親王	天曆四年五月二十四日	内（天皇）
③	円融	懐仁親王	天元三年六月一日	内（天皇）
④	一条	敦康親王	長保元年十一月七日	内（天皇）
⑤	一条	敦成親王	寛弘五年九月十一日	内（天皇）
⑥	一条	敦良親王	寛弘六年十一月二五日	内（天皇）
⑦	三条	禎子内親王	長和二年七月六日	内（天皇）
⑧	後一条	藤原通房	万寿二年正月十一日	殿（藤原頼通）
⑨	後一条	親仁親王	万寿二年八月三日	東宮（敦良親王）
⑩	後一条	章子内親王	万寿三年十二月九日	内（天皇）
⑪	後三条	実仁親王	延久三年二月十日	内（天皇）